

JICA's world

AUGUST 2009 No.11

08

特集 命をつなぐ 国際緊急援助





ミャンマー（ビルマ）第二の都市マ
ンダレーからバスで北へ約一時間の
町、タウンビョン。ここでは毎年8月、
ナツ神と呼ばれる精霊信仰の祭りが
約一週間にわたって催される。

戒律が厳しい南方上座部仏教の国
として知られるミャンマー。敬虔な
仏教徒は、毎日、仕事や学校行き
帰りにバゴダ（仏塔）の前で手を合わ
せる。だが、この国では表の仏への
信仰に対して裏の精霊ナツ神が存在
する。現世利益を求めない日々の仏
教的な生活とのバランスを保つため、
祭りでナツ神を呼び戻し、人々の煩
悩を象徴するかのようなたげを開
く。

主役は何といっても、全土から集
まった同性愛者たちが扮する、霊媒
師「ナツカドー」。人間とナツ神の間
を取り持つ彼らは、たばこをくわえ
体中に高額紙幣をまとい、酒で酩酊
状態となり歌い踊る。人々は、ナツ
神が乗り移ったナツカドーに家族の
健康を祈り、さまざまな日常生活の
悩みを相談して、日々の不安を和ら
げる答えを聞き出そうとする。

特に、修行僧が僧院にこもって修
行に専念する「雨安吾」のこの期間は、
仏教的な行事や祭りが控えられる。
そのため、全国から集う人々は、ナ
ツカドーに負けじと踊り回って恍惚
状態となり、羽目を外すことを楽し
んでいる。

春 夏
秋 冬

11

8月 ナツ神の祭り

霊媒師が歌い踊る 精霊信仰のうたげ



文・写真=宇田 有三

フォトジャーナリスト。中米や東南アジアの軍事政権、貧困を取材。写真集『ビルマ 軍事政権下に生きる人びと』、人権学習教材『ゴミに暮らす人びと』など。

Contents

02 春夏秋冬 霊媒師が歌い踊る精霊信仰のうたげ

04 特集 命をつなぐ国際緊急援助

被災地に笑顔を取り戻すために 中国
一人でも多くの被災者を救いたい ミャンマー
がれきの下の命に届く新たな技術を IEC訓練
JDR、私も参加しました！
JDR、こだわりの10アイテム



18 ゲンバの風 大友 仁 JICA国際緊急援助隊事務局オペレーションチーム
20 PLAYERS 人々が幸せになれる心のケアを 兵庫県こころのケアセンター
22 地域と世界のきずな リンゴ栽培でパキスタンの村おこし 長野県上伊那郡飯島町
24 ココロとココロ
～届け 私たちの思い～ 障害者の自立を目指す「愛の家」

26 特別レポート Qちゃんが “国際協力”と出会った日



28 JICA に聞きたい! 定年後、ボランティアに参加できますか?
29 JICA UPDATE
30 イチオシ!

31 地球ギャラリー エチオピア 静ひつの時 コーヒーセレモニー



39 MONO語り エチオピアの森がはぐくむコーヒー
40 MY ACTION 夏木マリ



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙 Photo:ロイター/アフロ

2008年5月18日、中国西部大地震の被災地・北川県で生存者の救出活動に当たる国際緊急援助隊(JDR)救助チーム





命をつなぐ 国際緊急援助

地震、洪水、ハリケーンなど、世界各地の災害現場で緊急援助を行う国際緊急援助隊（JDR：Japan Disaster Relief Team）。災害発生後、いち早く被災地に入り、日本の代表として被災者の救助や医療活動に全力を注ぐJDRの活動を紹介します。

災害の種類や規模に応じて チームを編成

海外で起きた大規模な災害に対し、被災者の救助、医療活動などを行う「国際緊急援助隊」（JDR）。日本が初めて国際緊急援助活動を行ったのは1979年のこと。内戦でタイに脱出したカンボジア難民を救援するため、医療チームを派遣した※1。82年には、JICAが医療関係者を派遣する「国際緊急医療チーム」を設立。87年の「国際緊急援助隊の派遣に関する法律」（JDR法）の施行を経てJDRとしての体制が発足、92年にはJDR事務局がJICA内に設置された。

JDRは、①警察庁、総務省消防庁、海上保安庁の救助隊員、医療班員などから構成され、被災者の捜索救助などを行う「救助チーム」、②医師、看護師、薬剤師、医療調整員などから構成され、被災者の診療を行う「医療チーム」、③技術者、研究者などで構成され、応急対策や復旧活動を指導す

る「専門家チーム」、④大規模な緊急援助活動や輸送活動などを行う「自衛隊部隊」の4つから成る。災害発生後、被災国や国際機関からの支援要請を受け、日本政府がJDRの派遣を決定してから、JDR事務局が災害の種類や規模に応じてチームを編成。救助チームは派遣決定から24時間以内、医療チームは48時間以内に出発し、現場での活動に当たる。

また、被災地にテントや毛布、浄水器などの物資を送る「緊急援助物資供与」も活動の一つ。迅速、確実、かつ大量に物資を送れるよう、シンガポール、マイアミ、フランクフルト、ヨハネスブルグの4カ所に備蓄倉庫を設置している。

日本の災害対策の 経験を生かして

これまで、JDRの派遣は97回※2、緊急援助物資の供与は380回に上り（2009年7月15日時点）、多くの自然災害を経

験してきた日本国内での教訓や対策のノウハウを生かして活動を行ってきた。最近では、08年のミャンマー・サイクロン「ナルギス」（10ページに関連記事）や、メデアにも大きく取り上げられた中国西部大地震（6ページに関連記事）での活動が記憶に新しい。

さらに、自然災害に加え、最近では感染症に対する緊急援助も展開するJDR。今年2月、デング熱の感染が拡大したボリビアに媒介蚊の駆除に使う噴霧器を、4月には新型インフルエンザが発生したメキシコにマスク19万枚や医師用の手術着・うがい薬などを供与した。今後の新たな取り組みとしては、医療チームの支援の幅を広げるため、被災地で手術や透析などができるよう、機能拡充にも力を入れていく予定だ。

また近年、国際緊急援助の新しい潮流として「国際協調」が進んでいる。大規模災害の発生後、被災国には海外から多くの緊急援助チームが駆け付けるが、各チームがばらばらな行動をとるとかえって混乱を招くこともある。そこで、各チームが連携し

JDR事務局の日々

被災地での緊急援助活動を縁の下で支えるのがJICA本部にあるJDR事務局だ。事務局のスタッフは、普段どんな業務を行っているのだろうか。

医療チームの研修

この日は朝から、JDR医療チームへの登録を目指す医療関係者を対象とした導入研修が大阪で行われていた。事務局のスタッフは研修が滞りなく進むよう、準備や運営に努める。また、自ら講義を行うことも。



救助機材のメンテナンス

別のスタッフは、救助チームが活動で使用した、チェーンソーや削岩機などの機材が保管されている成田空港近隣の倉庫へ。それら運び出し、隊員たちとメンテナンスや検査を行う。



国際訓練への参加

ネパールでは、大地震を想定した緊急援助の国際訓練が行われた。日本から参加した事務局スタッフも、設置された活動調整センターで情報を収集し、各国救助チームなどと連携しながら効率よく救助活動を進めていく。



緊急援助物資供与

A国で大規模な洪水が発生したという突然の知らせ。スタッフは外務省とも連絡を取り合い、供与する物資の種類、量を被害状況に応じて決定。A国に最も近い救援物資の備蓄倉庫に連絡し、直ちに輸送の手配を行う。



(2008年4月1日～09年7月15日)

発生時期	被災国	災害区分	物資供与(概算額)	
2008年	5月	ミャンマー	サイクロン	約1億円
	5月	中国	地震	約6,000万円
	5月	スリランカ	洪水	約1,700万円
	6月	フィリピン	台風	約4,000万円
	7月	ウクライナ	洪水	約1,200万円
	7月	モルドバ	洪水	約980万円
	8月	ベトナム	洪水	約1,800万円
	8月	ラオス	洪水	約1,250万円
	8月	ハイチ	ハリケーン	約1,700万円
	9月	ハイチ	ハリケーン	約2,200万円
	10月	キルギス	地震	約1,000万円
	10月	ホンジュラス	集中豪雨	約1,300万円
	10月	イエメン	洪水	約1,800万円
	10月	パキスタン	地震	約1,100万円
	11月	パナマ	集中豪雨	約1,000万円
	12月	バブアニューギニア	高潮	約1,300万円
2009年	1月	フィジー	洪水	約1,000万円
	1月	ソロモン諸島	洪水	約1,000万円
	2月	ボリビア	デング熱	約700万円
	2月	コロンビア	洪水	約1,100万円
	4月	メキシコ	新型インフルエンザ	約2,100万円

【自衛隊部隊】

医療・防疫などの緊急援助活動や船舶・航空機を用いた輸送活動、ヘリコプターによる空輸活動が主な任務。大規模な災害が発生し、特に必要があると認められるときに派遣される。



2005年スマトラ沖大地震・インド洋津波災害で被災した市街地で防疫活動を実施

【専門家チーム】

災害に対する応急対策と復旧活動を指導するのが主な任務。例えば、地震被災国の建物の耐震性診断や、新しい感染症の被害拡大を防止するための助言など。チームは、災害の種類に応じて関係省庁や地方自治体から構成される。



2007年韓国油流出事故では海水のサンプル調査を行った

【医療チーム】

被災者の診療のほか、必要に応じて疾病の感染予防やまん延防止のための活動を行う。メンバーは、自発的な意志に基づいてあらかじめ登録されている医師、看護師、薬剤師、医療調整員などで構成。派遣決定から48時間以内に出発する。



2008年ミャンマー・サイクロン「ナルギス」による被災者を手当する隊員

【救助チーム】

被災者の捜索、発見、救出、応急処置、安全な場所への移送が主な任務。チームは、警察庁、総務省消防庁、海上保安庁の救助隊員、医療班員などで構成され、派遣決定から24時間以内に出発する。



2008年中国西部大地震の被災地でがれきの中から被災者を捜索

※1 医療チームの派遣に先立ち、緒方貞子・現JICA理事長を団長とする視察団が現地調査に当たった。
 ※2 内訳は、救助チーム13回、医療チーム46回、専門家チーム30回、自衛隊部隊8回（船舶・航空機による輸送業務を含む）。
 ※3 災害や人道危機の際に効果的な人道支援が可能となるよう、被災国や国連機関、NGO、各国の緊急援助チームなど関係者間のさまざまな調整を行う国連機関。

タイムスケジュール

5月 <救助チーム>

12 (月)	14:28	地震発生		
15 (木)	正午過ぎ	JDR 派遣決定		
			第1陣 (32人)	第2陣 (29人)
15 (木)	17:00	結団式		
	18:29	成田発		
16 (金)	02:23	成都着 (北京経由)		
	10:00	青川県閬州鎮到着、現場調査開始	11:30	結団式
	15:30	青川県喬州鎮到着、活動開始	13:17	チャーター便にて成田発
			17:55	成都着、喬州鎮へ移動
17 (土)	07:25	母子の遺体を発見		
	11:35	喬州鎮での活動終了		
	12:20	第2陣と合流		
	23:45	北川県北川第一中学校に到着		
18 (日)	00:45	北川第一中学校で現場調査、捜索活動		
	08:00	17人は北川市街地の活動サイトへ		
	20:00	北川第一中学校での活動終了		
	23:00	北川市街地での活動終了		
19 (月)	08:00	活動再開		
	08:30	安全面から活動中止を中国側が要望、活動終了		
	18:30	成都に移動		
20 (火)		四川省副省長表敬訪問、隊員のメディカルチェック など		
21 (水)	03:18	チャーター便にて成田発		
	08:56	成田着		
	09:45	解団式		

5月 <医療チーム>

20 (火)	18:25	チャーター便にて成田発	
	22:50	成都着	
21 (水) ~ 31 (土)		成都市内の華西病院で活動	

6月

1 (日)		テント撤収、四川省関係者への報告会 など
2 (月)	08:00	成都発
	20:20	成田着
	21:00	解団式



JDR救助チーム
 海外の救助隊として初めて
 中国・四川に飛ぶ

2008年5月12日14時28分
 (現地時間)。マグニチュード7.9の地震により、中国の広大な大地が激しく揺れた。震源地は



最初の活動サイトとなった集合住宅のそばでは、がけ崩れが発生しており、夜通し緊迫した状態が続いた

被災地に笑顔を取り戻すために

2008年5月12日、中国四川省でマグニチュード7.9の大地震が発生した。JICAは5月15日～6月2日にかけて、国際緊急援助隊(JDR)の救助チームと医療チームを現地に派遣。一人でも多くの命を救おうと、約3週間にわたり活動を行った。



がれきの下の人を救うため、隊員は手作業で丁寧に掘り起こしていく

務省消防庁、海上保安庁の担当者、直ちにメンバーの召集を開始する。成田空港集合は約4時間後。その時、JDR事務局の市原正行・業務調整員らは、空港近くの倉庫から搬出する資機材の手に配に追われていた。広尾病院救命救急センターの中島康さんは「3年前にJDRに登録したときから、次は自分が行くんだという覚悟で準備を重ねてきました。電話を受けたとき

は「ついに来たか」と身が引き締まった」と振り返る。16時に成田空港に集まったのは、救助チームの第1陣32人。日の丸が胸に刻まれたユニホームに袖を通し、「一人でも多くの命を救いたい」と気持ちを一つにした。北京に降り立ち、国内線を乗り継いで成都へ。現地入りしたのは16日の午前2時半。休む暇もなく、約400キロ北にある青川県閬州鎮へ向か

った。警視庁警備部の齊藤昌巳さんいわく、「山が切り崩され、土砂の中に村がすっぽり埋まっていた。遠目にですが、倒壊した家屋や人の歩いている姿が見えて。被害の大きさを感じました」。団長をはじめ、数人が現場調査に入ったが、あまりに被害の状況がひどく、足も踏み入れられない状態だった。そこで中国側と話し合い、約

1時間南にある喬州鎮に活動サイトを変更。病院の集合住宅に、母親と生後2カ月の赤ちゃんが埋まっているという情報が入っていた。手作業で少しずつがれきを掘り返していく隊員たちを、不安そうに見守る近所の人たち。電気が足りないだろうと、裸電球をつなげて持ってきてくれた人もいた。しかし日が暮れるにつれて、救助活動は難航。ここで中断は

西部にある四川省。死者約7万人、負傷者約38万人、行方不明者約1万8000人を記録し、現地はたちまち混乱の渦に巻き込まれた。その悲惨な状況は、すぐにメディアを通じて世界中に伝わった。1995年の阪神・淡路大

震災を思い起こさせるような映像。JICAの国際緊急援助隊(JDR)事務局は、いつでもチームを送り出せるよう準備に取り掛かった。中国政府から正式な派遣要請があったのは、地震発生から3日後の15日正午前。警察庁、総

患者の緊急移送を手伝う医療チームの隊員(左)



北川第一中学校で、崩壊した1、2階部分に入り込み捜索する救助チームの隊員。右の階段の上から、子どもたちが不安そうに見守る

したくない。齊藤さんは「現地の機材を貸してもらえないだろうか」と提案。交渉の結果、重機を一台借りることができ、救助活動は夜を徹して行われた。「疲れというか、時間の流れを感じなかった。とにかく早く助け出してあげたかったんです」(齊藤さん)

そして、17日朝の7時25分。がれきの下に埋まっている女性の姿が――

「いたぞー！」
木材を一つ一つ取り除いていくと、わが子に覆いかぶさるように倒れている母親の姿が見えた。残念ながらもう息はなかった。遺体を丁寧に包んで家族に

引き渡し、整列して黙とうをささげる隊員たち。誰が声を掛けただけでなく、全員の弔いが一つになって生まれた行動だった。

第2陣と合流 一人でも多くの子どもの命を救いたい

活動も終盤に差し掛かった17日正午過ぎ、第2陣の30人と合流。次の活動サイト、北川きたがわ山鎮さんちんにある北川第一中学校に向かった。移動中、全校生徒1500人のうち、まだ700人が埋まっているとの情報が入る。「こうしている今でも、助けを求めている子どもたちがたくさんいる。現場に着いてすぐに動けるよう、隊員同士で打ち合わせをしていました」と川崎市消防局の原光生さんは話す。

としての活動終了が決まった。「正直とても悔しかった。まだできることはあると……」(原さん)。

その後、JDRの活動は20日に現地入りした医療チームにバトンタッチ。約10日間、現地スタッフと連携しながら、成都市内にある四川大学华西病院で医療活動を行った。隊員のサポートにより、震災直後に出産した女性からは「将来この子に日本語を学ばせて、10年後、皆さんに『ありがとう』と伝えたい」という、胸が熱くなる言葉ももらった。

救助チーム、医療チーム合わせて、約3週間にわたったJDRの活動。「小さな女の子が



青川県喬庄鎮で母子の遺体を発見し、黙とうをささげる救助チームの隊員 ©AFP=時事

中学校に到着したのは18日午前0時前。不運にも激しい雨が降り、地盤がゆるんで危険な状況だった。人命探査装置を使って捜索活動を行ったが、反応は見られない。夜が明けて本格的に活動を開始することになった。

4階建ての校舎の1、2階部分は完全につぶれていたが、所々に少し隙間がある。生存者がいると信じ懸命に活動が続けたが、「逃げ出そうとしたのか、廊下に重なるようにして倒れている子もいました。あちこちにノートが散らばっていたりと、本当に直前まで勉強をしていたんだなど。何とも言えない気持ちになりました」(原さん)。

翌日、近くのダムが決壊する危険性があるため、救助チーム

チョコレートを持ってきたり、住民の人がカプラーメンとお湯を差し入れてくれたり……。現地の人たちの温かさが支えでした」と齊藤さん。JDRの隊員の思いは、中国の人々の心にも確かに届いたようだ。

そして震災から1年以上経った今も、JICAの復興支援は続いている。6月からは、被災者のこころのケアに携わる人材を育成する「四川大地震復興支援―こころのケア人材育成プロジェクト」がスタートした(20ページに関連記事)。

四川の人々が、1日でも早く安心した生活を取り戻せるよう、JICAは支援を継続していく方針だ。



救助犬はにおいをかぎ分け、がれきに埋もれた生存者を捜す

JDR四川派遣で初のJALチャーター便運航

JDRは、政府の派遣命令があったから、救助チームは24時間以内、医療チームは48時間以内に出発する。しかし場所によっては、飛行機の乗り継ぎが困難で、到着までに時間がかかってしまう。そこでJICAは、被災地でいち早く活動を始めることができるよう、日本航空(JAL)とチャーター便の運航に関する覚書を2006年6月に締結。何度もシミュレーションを行い、準備を進めてきた。そして08年5月、JDR史上初となるチャーター便を活用した派遣が実現した。

JALに一報が入ったのは、15日18時ごろ。中国西部大地震の救助チーム(第2陣)を、チャーター便で派遣できないかという依頼だった。「スタッフ総出で、現地の着陸許可、機材、パイロット、客室乗務員の手配などに奔走しました」とJAL東京支店の西村港さん。現地ではJAL上海支店のスタッフが成都に向き、受け入れ準備を進めた。そして16日の13時過ぎ、第2陣が無事に成都へ向けて出発。依頼から19時間後のことだった。機内では客室乗務員が「一人でも多くの命を救ってください」と激励し、隊員の士気を高めたという。

「国際線運航に実績の厚いJALだからこそできる支援であると思います」と国際営業部の西山良寛さん。「JALの特性を生かした社会活動の一つとして、これからも全面的に協力していきます」。

1秒でも早く被災地へ。チャーター便の利用により、さらに迅速な救援活動が期待できそうだ。

ラブッタまではヤンゴンから陸路で約13時間。道なき道を、総勢40人を乗せた9台の車両が列を成して進んでいく。被災から3週間近くたったということもあ

過酷な環境下で
1200人以上を診療

26日に中心都市ヤンゴンに着した一行。保健大臣と会談したほか、国連機関やNGOなどから情報収集を行った。その中で、「高度な医療資機材を携行する日本のチームには、被害の大きい地域に行つてほしい」という話が保健大臣からありました」と調査チームの団長を務めた(財)救急振興財団の金井要医師。そして27日昼ごろ、ミャンマー政府から日本に正式に出された支援要請。29日、日本航空(JAL)のチャーター便で成田空港を出発した医療チームは、デルタ地帯の最先端、ラブッタの避難民キャンプに向かった。

に限り、援助を受け入れることをミャンマー政府が表明したのだ。「ようやくチームを派遣する可能性が出てきた」(横井職員)。日本は、被災状況と支援ニーズを確認すべく、翌25日に調査チームを派遣した。

しかし、「国際緊急援助隊(JDR)を派遣することはないだろうと考えていた」と話すの

被災から3週間後
医療チーム派遣



一人でも多くの
被災者を救いたい

2008年5月初旬、ミャンマー南部一帯に猛威を振るった巨大サイクロン「ナルギス」。死者は未曾有の7万人以上。その最大の被災地ラブッタに、国際緊急援助隊(JDR)医療チームが向かった。

は、JDR事務局(当時)の横井博行職員。海外からの援助を受け入れれば、国内の状況がメディアなどを通じて世界中に伝わる。軍事政権下にあるミャンマーにとってそれは好都合とはいえなかった。

(右上) 延べ1,200人以上を診察した医療チーム。外傷、感染症に次いで精神的な疾患も目立った
(下) 沿岸地域を北上していったサイクロン「ナルギス」は、木々や家屋を次々になぎ倒し、港付近では船が陸に乗り上げた



り、車中から望む町は整然としていたかに見えた。しかし、約6400人が避難生活を送るキャンプには、診療を求めるとくさんの患者が待っていた。

い日もあれば、湿度が100%に達しテント内が蒸し風呂状態になる日もあった。これが3度目のJDR派遣となった金井医師も「今回は体力的にもきつかった」と話す。

目立ったのは、感染症による幼児の下痢や、皮膚疾患、精神的苦痛からくる体調不良などの症状。また、劣悪な環境の中でマラリアや結核の疑いがある患者もいた。「中には、木につかまってサイクロンをしのぎ、そのせいで手がしびれ、まひしてしまつた男性もいた」と国立国際医療センターの園田美和看護師。聞けば、その男性の足には、彼の子どもが必死にしがみついていたという。サイクロンのすさまじさがうかがい知れる。

そんな過酷な環境にあつても、一人でも多くの患者さんを救いたい一心で、隊員は力を振り絞る。「被災者は私たち以上につらいはず。もつと何かしたいと思つた」。そう話す園田看護師は、医師の補助・介助やトリアージなど看護師としての通常の活動以外にも、検査技師らとともに下痢の原因と考えられた池の水の水質検査や、手洗いなどの公衆衛生活動を、休憩時間を使い自主的に行つた。

辺にも被害は広がっており、現地での食料調達には困難が予想されていた。そこで、通常(3日分)の1.5倍の量を日本から持参、ヤンゴンで3日分を購入。さらにこうした事情を知つたJALからは、機内に積んでいた食料などの提供があつた。隊員が体調を崩せば、被災者を助けることさえできない。

9日間の活動で、延べ1202人を診療した医療チーム。乾期と雨期の境で、気温が40℃近い

その後JICAは、ミャンマーで復旧・復興支援へと協力の形をシフトし、被災地域の水運の再建を進め、さらに小学校を兼ねたサイクロンシェルターの設置や農業基盤の整備などに協力する予定になっている。

2人を診療した医療チーム。乾期と雨期の境で、気温が40℃近い

今回の被災地であるラブッタ周

被災者が被災者でなくなる日まで——。JDRは、被災者が通常の生活を取り戻すために重要な役割を担っている。



(上) 屋外の待合室で順番を待つ被災者。JDRの診療を求め、連日たくさんの人々が列を作つた
(中) 今回初めてJDRに参加した園田看護師。夫と子をつ失った女性に、「それでも日本人の先生に診てもらえてよかった」と声を掛けられたことが、悔しくもうれしかったという
(下) 調査チームに引き続き、医療チームの団長も務めた金井医師。活動最終日、報告書をラブッタ地区の保健担当官に手渡し、JDRの任務は終了した



JALから提供された物資は、水やジュース、インスタントラーメン、子ども用のおもちゃ、おむつ、トイレトペーパーなど



(上)横浜海上防災基地に集結した隊員たち。延べ4日間の訓練に臨んだ(撮影:久野真一)
(右)初日には、訓練に先立ってIECに関する講義が行われた
(左)がれきに見立てたコンクリートを持ち上げて、救助できる空間を作り出す技術も学んだ

「日の丸を背負う重さをひしひしと感じる」というのは、08年からJDRの訓練に参加して

チームの国際的な能力評価基準となるIEC(国際搜索救助諮問グループ外部評価分類)の受検対策として行われた(囲み記事参照)。JDRでは2010年3月に受検を予定している。これまで、JICA、外務省、警察庁、総務省消防庁、海上保安庁、医療班からなる「IEC受検準備委員会」を設置するなど、最も高い能力基準となる「重(Heavy)」の認定に向け一丸となつて準備を進めているJDR。「すでに基準の大半は十分にクリアしている」と貝原孝雄・JDR事務局長が話すように、JDRは国際的にもトップレベルの技術を持つが、唯一、「重」レベ

ルの認定に必要なショアリングは、国内の救助活動で正式に導入されておらず、新たにノウハウを習得する必要があった。「しっかりと声を掛け合つて!」「くぎを打つ場所は正確に!」訓練を指導する在日米海軍統合消防局佐世保署の草場秀幸さんが、真剣なまなざしで隊員たちにアドバイスを送る。01年のアメリカ同時多発テロで、ショアリングを使った救助活動をテレビで目にして衝撃を受けたという草場さん。以降、アメリカから現役の救助隊員を招いてト

レーニングを行うなど、国内での草分け的存在として、一部の消防隊を対象にショアリング技術の普及に努めてきた。「切った木を組んでいるのを見て、『本当にこれが救助なのか?』と初めは驚きました。ショアリングは救助活動の安全性を格段に高めることができる。すぐに日本でも導入したいと感じました」ショアリングは、建物の倒壊パターンに合わせたさまざまな手法や方法論が、すでにアメリカを中心に確立されている。その技術を学べば、二次崩壊の危険性から以前はあきらめざるを得なかった現場でも、今後は救助活動が行える可能性がある。JDRのみならず、国内の救助活動全体にもたらす影響も大きい。

「正確で緻密な作業が要求される中、水平器、メジャーを使ってパーツの傾き具合や長さを調べながら、見事な連携プレーで支柱を設置していく隊員たち。技術を習得しようとする一人一人の集中力と意気込みが伝わってくる。」

IECとは

IEC(INSARAG External Classification)とは、都市型搜索救助活動の調整を行う国連傘下の搜索救助チームの国際的ネットワーク・INSARAG(国際搜索救助諮問グループ)が、各国の救助チームの実力を測るため、2005年に定めた外部評価分類のこと。搜索、救助、医療、ロジスティクスなどの観点から、救助チームの行動と能力を評価する。「重(Heavy)」「中(Medium)」「軽(Light)」の3段階に分類され、「重」チームには、24時間の活動を10日間継続できる能力や、搜索犬、搜索機材を使った活動、ショアリング技術などが求められる。これまでに11カ国のチームが「重」、2カ国のチームが「中」として認定されている。基準を設けることで、能力が異なるチームの無秩序な活動による混乱を避けるとともに、チーム間の活動調整を円滑にし、被災状況に応じて効果的・効率的な救助が行えるようになる。

IEC受検に向けショアリングを習得

「JAPAN」の文字が刻まれた、鮮やかなオレンジ色のヘルメットをかぶった国際緊急援助隊(JDR)の隊員たちが、チェーンソーで手際良く木材を切断していく。5月下旬、横浜港に程近い海上保安庁横浜海上防災基地に、全国の警察、消防、海上保安庁の救助隊員66人が集い、大規模な訓練が行われていた。切

材を、垂直や斜めに組んで支柱を作り、訓練用に設置されたプレハブ小屋の天井や外壁を支えていく。これは、地震などの災害で倒壊した、または倒壊寸前の建物の二次崩壊を未然に防ぎ、取り残された被災者の救助活動を安全に行うための「ショアリング」という技術だ。被災地で起こり得るさまざまな事態を想定し、JDRでは技術やチームワークを向上させるための研修・訓練を日ごろから行っている。今回の訓練は、救助



ショアリングでは、木材を切断してパーツを作り(左)、組み合わせる角度や打ち込むくぎの位置などに注意しながら支柱を設置していく(撮影:久野真一)

がれきの下の命に届く 新たな技術を

被災現場の状況に合わせ、より効果的・効率的な救助活動が行えるよう、国際緊急援助隊(JDR)の登録者は、研修などを通じて日ごろからスキルアップに努めている。2009年5月、まだ日本に導入されていない新技術を学ぶ救助チームの訓練現場を取材した。



垂直方向のショアリングを指導する草場さん(右)。「いかに一人でも多くの被災者を救い出すか、ということに忘れずに技術を磨けば、本番でも必ず良い結果が出るはず」とエールを送る(撮影:久野真一)

JDR、私も参加しました！

国際緊急援助隊(JDR)は、救助隊員、医師、看護師、薬剤師など、これまで派遣された隊員たちは、何を見てどんなことを

さまざまな職種からメンバーを召集して被災地に派遣する。感じたのだろうか。JDR隊員の6人に話を聞いた。

北海道消防学校

講師
丹野克俊さん

2006年インドネシア・ジャワ島中部地震
医療チーム(医師)



国立埼玉病院

診療放射線技師
倉島勝治さん

2006年インドネシア・ジャワ島中部地震
医療チーム(医療調整員)



松阪地区広域消防組合消防本部

救急救命士
渡部歩さん

2005年パキスタン地震
医療チーム(医療調整員)



兵庫県災害医療センター

看護師
山本裕梨子さん

2005年パキスタン地震
医療チーム(看護師)



海上保安庁横浜海上保安部
災害対応型巡視船いず

主任航海士
寺門嘉之さん

2004年スマトラ沖大地震・インド洋津波災害(タイ)
救助チーム(救助隊員)



警視庁
警備部警備第二課

警備装備第三係長
山川良博さん

2003年アルジェリア地震
救助チーム(救助犬ハンドラー)



医師として迅速な傷の手当てを

も ともと海外での医療活動に興味があり、自分が研修してきた救急・災害医療が災害時にどう生かせるか知りたいと思いJDRに登録しました。ジャワ島中部地震では先遣隊として現地に入り、まずは活動サイトの選定を行いました。現地の空港周辺はそれほど大きな被害が見られずぼとしていたのですが、被災地のバントゥール県に入ると建物は倒壊し、病院の外にけが人があふれ返っていたので、「重症の患者さんにすぐ対応しなければ」と気を引き締め直しました。発災から比較的早い段階で現地入りしたこともあり、崩れてきた天井が直撃して皮膚が裂けていたり、骨が折れていたり、生々しい傷を負った人が次々に訪れました。日中はとにかく暑くつらかったのですが、患者さんたちが元気になっていく姿や笑顔が力になりました。少しですがインドネシア語を覚えて、現地の人と会話のキャッチボールができたとき、とても喜んでくれたことも記憶に残っています。

医療の原点を体験できる現場

自 分の仕事を生かして被災者の役に立ちたい」と思いJDRに登録しました。JDRでは2005年から移動可能なレントゲン機材を携行するようになり、レントゲン技師として派遣されました。活動中、常に頭にあったのは「少しでも痛い時間を短くしてあげたい」ということ。テントの入口には、インドネシア語で「SEMOGA LEKAS SEMBUH(早く良くなりますように)」とメッセージを張りました。また、シーツで仕切って更衣室を作ったり、横になってレントゲンを撮っても体が痛くならないよう、現地でベニヤ板を調達してベッドに体が沈まないようにしたり、少しでも快適に診察を受けてもらえるよう工夫をしました。また、レントゲン写真を撮るだけでなく、地震が起こって元気のない子どもたちに何かできることはないかと思って、彼らの心のケアにもなればと休憩中に手品をしました。国境を越えて多くの人と触れ合い、医療の原点を体験し元気で新しい目標をもらいました。

被災者の心のケアも大切に

2 001年より三重県松阪市の計画で国際貢献が重視され始め、当消防組合もその一環として組織を挙げて救急救命士をJDRに登録させることにしました。実は学生時代、興味があった青年海外協力隊に応募できなかったのが、その思いをかなえるべく、私もJDRに登録しました。被災地では、発電機の整備やテントの設営から、患者さんの血圧・脈拍・体温の測定、隊員の食事の準備まで、幅広く活動しました。すべてが救急救命士の業務とつながっており、これまで培ってきたノウハウを生かすことができました。また問診では、被災でストレスを負った人たちに少しでも安心感を与えられればと、簡単な単語ですが、ウルドゥー語を使いました。そうしたら、皆せきを切ったようにいろいろな症状を訴えてきました。生活習慣、文化、宗教の違いもあり、こちらの思いが伝わらないこともありましたが、現地語でのコミュニケーションは、被災者の心のケアにもつながったのではないかと思います。

JDRの活動を通じて学ぶ

2 003年から兵庫県災害医療センターで勤務するようになってJDRについて初めて知り、「自分の技術を病院の外、そして海外で生かしたい」と思い登録しました。初めての派遣はパキスタン地震のとき。首都の被害は小さかったのですが、阪神・淡路大震災のように、震源近くの山間部に入っていくにつれ、崩れているところが見えてきて衝撃的でした。小学校の校庭にテントを張って1日100人くらいを診察し、腫れている傷口の処置などを行いました。2週間、慣れない環境で戸惑うこと、つらいこともありましたが、ほかの隊員や勤務先の病院スタッフからの温かい励まし、現地の方々の「来てくれてありがとう」という言葉で乗り切ることができました。テントで寝泊まりをしていたのですが、近所の方がカレーを作ってくれたこともありました。JDRの活動や訓練は、看護師として勉強になることが多く、患者さんに対する接し方など、普段の業務にも役立っています。

海上保安庁の特色を生かして

以 前から「職務を通じて国際貢献ができれば」という思いがあり、「いつかは自分もJDRに」と準備していました。航空機を乗り継ぎ現場に出動する様子は、普段の形態と変わらず平常心で臨みましたが、現地に着くと、沿岸部は辺り一面がれきの山。港に停泊していた船が丘に乗り上げるなど、悲惨な状況を目の当たりにし、津波のエネルギーのすさまじさを実感しました。現地の消防隊らと救助活動を行うことがあったのですが、言葉が通じなくても目的は同じ。いつの間にか一体感が生まれていました。また、NGOの方から差し入れをいただき、現地の人の温かさが大きな支えになったことを覚えています。また、離島にヘリコプターや船を使って移動する機会がありましたが、いつもと変わらぬ現場進出手段だったので、機材の積み下ろしなどロジスティックスの面でも経験を生かしたのではないかと思います。今後も海上保安庁の特色を生かし、幅広い救援活動に貢献していきたいです。

救助犬とともに被災者を救う

阪 神・淡路大震災のとき、スイスの災害救助犬の活躍が大きく取り上げられました。警視庁でも救助犬の育成を始めたところだったので、いつか海外の災害現場でも役に立てればと考えていました。JDRに救助犬が導入されたのは、この2003年アルジェリア地震での救助活動からで、私はチーフハンドラーとして、2頭の救助犬を帯同し活動しました。活動サイトは、細かいコンクリートの破片が積み重なり、その下からは、においが出てきにくい状況で、「どこに」「どのタイミング」で犬を入れるかに神経を使いました。救助犬にとって、海外で活動するのは初めてのことで、長時間のフライトも心配でしたが、現地に着くといつもと同じように力を発揮してくれました。また、厳しい環境の下で活動する隊員、被災地の人たちにとって、救助犬は心の癒やしにもなっているようです。これからもJDRのメンバーとして、救助犬とともに一人でも多くの命を救うことができたいと思っています。



ポータブルレントゲン

8

他国の国際緊急援助チームにはあまり装備されていない「ポータブルレントゲン」。放射線技師がメンバーとなる日本のJDRならではのアイテムだ。小型のため、テント内でも十分使用できるほか、撮影結果をパソコン上で確認できるので、現像のための機材や廃液の心配もいらない。2005年のパキスタン地震以降、JDRで使われてきたポータブルレントゲンは、「正しい診断が下せる」と医師の間で好評だ。



ダブルブレードカッター

5

国内の救助活動ではあまり使われてこなかった「ダブルブレードカッター」。刃の半径(15センチ程度)の深さまでしか切れない1枚刃のエンジンカッターと比べ、2枚刃のダブルブレードカッターは中心の留め金の出っ張りがなく、40センチほどの厚さのものまで切れる。作業効率が高まることから、ここ1年の間にJDRで導入されるようになった。



ベスト

2

医療チームのシンボルが、背中に「JAPAN国際緊急援助隊」と刻まれたこの「ベスト」。暑い地域での着心地を考え素材はメッシュ。機能性を重視し、さまざまな形状のポケットが計9個もある。左肩にはマグライトが、右胸には無線や携帯電話が入る。また腹部には、大きな二重ポケットがあり、隊員はファスナー付きの奥ポケットに貴重品を、手前に使用頻度の高いペンやメモ帳などを入れている。



十字テント

1

活動の核となるのがYKK AP(株)と共同開発した「十字テント」。雨風に強く、ファスナーで各パーツを連結することで用途に合わせた形に設営できる。以前は一般的ななまぼこ型を使用。しかしテント内には、受付、診察、処置、検査、薬局といったセクションがあり、患者や隊員の動線が確保できていなかった。そこで、より医療活動に適したテントを開発。その後も窓を増やすなど改良を重ねている。



地震警報機

9

地震の被災地で活動するときに欠かせないのが、可搬式の「地震警報機」。人が感じない地震の初期微動P波を感知すると、音とランプで知らせるシステム。その後の大きな揺れを予知し、二次災害の防止に役立つ。隊員の安全確保のために2009年から導入され、救助中でも警報が発せられると隊員は一時退避することになっている。



アルファ米

6

水さえあればふんわりしたご飯ができる「アルファ米」。一度炊いたお米を乾燥(アルファ化)させることで長期保存を可能にし、保存食・非常食として国内でも備蓄される。白米以外にも、五目ご飯や炊き込みご飯、白がゆなどもあり、味が豊富。また、腹持ちもよいことから、過酷な環境の中、隊員たちが元気に活動するための力の源となっている。



救助犬

3

2003年のアルジェリア地震以降、JDR救助チームの一員として共に派遣されるようになった「救助犬」。人間にはないその鋭い嗅覚を使い、倒壊した家屋や土砂などに埋もれた行方不明者を捜索、発見するとほえるよう訓練されている。昨年の中国西部大地震の際は、4人のハンドラーのもと、3頭の救助犬が活躍した。



ボーカム

10

棒の先端にカメラが付いていることから、「ボーカム」と名付けられたこの救助機材。人間の入れないがれきのすき間から棒を挿入し、行方不明者を捜索する。棒は最大で4メートルまで伸び、モニターで中の様子を確認しながら作業できる。また、先端にはスピーカーとマイクも付いており、音声で生存者を探知することも可能。



衛星電話

7

被災地の様子や活動状況をJICA本部内のJDR事務局に報告し、また事務局からの指示を被災地に伝えるために不可欠な「衛星電話」。通信速度はそれほど速くないものの、インターネットができる上、FAXやEメールで写真・文書を送ることもできる。各チーム、移動中に便利な電話・アンテナ一体型と、アンテナが大きくより性能の高い分離型の2種類を携行している。



ジュラルミンケース

4

隊員の間では「ジュラケ」と呼ばれている機能性に優れた「ジュラルミン(金属)ケース」。側面のカバーを開けると、薬剤、医療機材(ガーゼや包帯、針、糸など)、事務用品(カルテなど)が種類別に入った棚に変身する。テント設営後、迅速かつ効率よく医療活動を開始できるよう、事務局がその改良にかかわった。3チーム分が成田空港そばの倉庫に備蓄されている。



JDR、 こだわりの 10アイテム

迅速かつ効率的に活動し、より多くの人命を救うため、国際緊急援助隊(JDR)が導入したこだわりの携行品。これまでの経験から編み出されたモノ、独自に開発・改良したモノ、他のチームにはないモノ、隊員の士気を高めるモノなど、JDRの活動を強力にバックアップするアイテムの数々を紹介する。

2008年11月、加藤さん(右から3人目)は四川省を訪問し、仮設住宅などで心のケアのニーズを調査した



人々が幸せになれる 心のケアを

1995年の阪神・淡路大震災を契機に、被災者の精神的なストレスのケアに取り組んできた兵庫県こころのケアセンター。JICAと協働で、災害現場で活動する国際緊急援助隊員や、海外の被災地の人々の心のケアにも取り組んでいる。

災害に起因する ストレスと向き合う

1995年に発生した阪神・淡路大震災。死者約6500人、負傷者4万4000人に及んだこの震災は、建物の崩壊など物質的な被害だけでなく、人々の心に深い傷を残した。災害時に受けたショックによる「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」という言葉が、日本で広く知られるようになったのもこのころからだ。

兵庫県こころのケアセンター（以下、センター）は、震災の経験を教訓に、2004年に神戸市に開設された。日本で唯一PTSDを専門に扱う機関として、災害が引き起こすストレスやトラウマなどの調査・研究のほか、敷地内にクリニックを併設し、一般患者の診療や相談も行う。また国内のみならず、海外で発生した災害での「こころのケア」にもJICAと協働で取り組んでいる。

その始まりは04年12月のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害。国際緊急援助隊（JDR）医療チームの一員として、副センター長の加藤寛さん、精神科医の藤井千太さん、臨床心理士の大澤智子さんから成る



6月に来日した中華全国婦女連合会の鄒曉巧(左)さんは、「加藤さんの講義を聞き、阪神・淡路大震災の教訓を分かち合えた。私たちが後を追って努力していきたい」と意欲を語った

「こころのケアチーム」が、インドネシアのバンダアチエで、被災者の心のケアに当たる現地専門家などにアドバイスをを行った。

避難所などを回る中で、日本人ボランティアと接する機会もあった加藤さんたち。そこで、救助する側が受ける「惨事ストレス」の重大性を認識した。「災害現場での仕事は想像以上に精神的負担がかかります。経験が豊富な人でも惨事ストレスを受ける可能性はあり、JDR隊員のストレスも相当なはず」と加藤さん。被災地でたくさんの子どもの遺体と接した人は、帰国後にわが子を見たとき、その記憶がフラッシュバックすることもあった。

そこでJICAとセンターは、隊員への精神的なサポートを強化するため、08年7月に協定を締結。まずは5月に中国、ミャンマーに派遣された隊員を対象にアンケートを実施した。質問は「派遣中、帰国後の体調はどうか?」「現地では睡眠が取れたか?」「帰国後、精神的にとても疲れた」と感じたか」などで、活動の状況や帰国後の気持ちの変化などを把握できるようにしている。

その回答をセンターが分析し、診断結果を本人に返送。何か異常があればすぐに診断が受けられるよう、相談窓口を設けた。このときは深刻

なストレス障害を負った隊員はいなかったというが、「活動に専念するあまり、ストレスがあっても、自分では気付かないことが多い。まずは、そのようなことが起こり得るのを知ることが大切です」と大澤さんは言う。

震災の傷跡から 立ち直るために

センターでは、中国西部大地震の復興支援としてJICAがこの6月に開始した「四川大地震復興支援」こころのケア人材育成プロジェクトにも協力している。被災から1年以上たった今も、四川省にはいま

だ地震のショックから立ち直れない人が多い。にもかかわらず、特に被害の大きかった山岳部などで、被災者の心のケアに当たる人材が不足しているという。

プロジェクトでは、日本人専門家の派遣や研修員の受け入れを通じ、これから5年かけて、中央・地方レベルで被災者の心のケアに当たる人材を育成していく。専門家として携わる加藤さんは、「阪神・淡路大震災で得たノウハウを生かし、医療従事者、行政、教育関係者など「こころのケア」に携わる人材が、専門的な教育を継続して受けられる環境づくりに取り組むみたい」と話す。



(上)小学校では、ゲームなどの集団行動を通じて子どもたちへのケアが行われている
(下)仮設職業訓練所では、震災で家族を亡くした女性たちが手工芸品の作り方を学ぶ



兵庫県こころのケアセンターのある「HAT神戸」は、震災で倒壊した工場の跡地を利用して開発された

6月には、中国から18人の研修員が来日。兵庫県や新潟県長岡市の心のケアの取り組みを視察した。北京師範大学心理学院院長の許燕さんは、「センター内にあるクリニックは、個人のプライバシーを守る構造になっているなど、設備面が充実しているので驚きました。ハード面の整備はもろろん、いろいろな治療方法を学び、自身の診療でも取り入れていければ」と語る。

兵庫と四川。一日でも早く、被災した人々に明るい笑顔が戻るよう、共に「こころのケア」に取り組んでいく。

リンゴ栽培でパキスタンの村おこし

果樹栽培が盛んな長野県上伊那郡飯島町では、リンゴ栽培の高い技術を生かして、パキスタンの村おこしを支援している。

【長野県】

上伊那郡飯島町



飯島町に実ったリンゴを確かめるアリさん、カリムさん(ムルフン村の村長)、シャフーさん(左から)。町の農家で指導を受けたほか、青森の農園や都内の青果市場なども訪れた

長野県上伊那郡飯島町

面積86.94平方キロ、人口約10,600人。江戸時代には幕府の陣屋が置かれ、信濃の国の政治上、重要な役割を果たした。自然豊かな飯島町のキャッチフレーズは「二つのアルプスの見える町」。リンゴやナシをはじめとした果樹のほか、花やきのこの栽培が盛ん。精密・電子関連の企業も多く、外国人住民の割合は5%を超える。2004年からは、飯島町における初の途上国支援として、パキスタン北部ゴジャール地方のムルフン村に対し、リンゴ栽培を通じた村おこしの協力をしている。

商品価値の高いリンゴを作りたい

パチン、パチン、というハサミの音とともに、青く小さなリンゴが次々と地面に落とされる。摘果と呼ばれるこの作業を行うのは、リンゴ農家の北原かづ子さんとパキスタンからやってきたシヤラファット・アリ・ハーン(愛称シヤフー)さんだ。ここ長野県上伊那郡飯島町では、パキスタン北部ゴジャール地方のムルフン村に対して、リンゴの品質向上を通じて村おこしを支援している。JICAの草の根技術協力事業として2004～05年まで実施された最初のプロジェクトは、ムルフン村から選ばれた農民3人を1年間受け入れ、町の3軒の農家がそれぞれマンツーマンでリンゴの栽培方法を指導した。

プロジェクトの第2ステージである今年も、以前ここで研修を受けた3人のうち2人が再来日し、1月から2月にかけては剪定と害虫防除を、5月から7月には摘花と摘果のおさらいをした。花やまだ小さな実を摘み取るこれらの技術は、大きくて質の良いリンゴを作るために欠かせない。「シヤフーちゃん、これは来年実らせる枝だから、こうして実を落としてね」。まるで息子に語りかけるような北原さんの言葉を、シヤフーさんは真剣なまなざしで聞いていた。

室長の宮沢卓美さんは、「事業にかかわる方たちの熱意に町の職員も触発されています。これによって町に多文化共生の意識が根付いてほしい」と語る。プロジェクトは来年で終了するが、人々のきずなはこれからも続いていきそうだ。

佐々木さんとアリさん。「息子が農業研修生としてアメリカに行ったことがあるので、そのお礼という気持ちでアリさんを受け入れました」(佐々木さん)



摘果を指導する北原さんとシャフーさん。「研修が終わっても私たちの縁は終わりにじゃないよ。今度は子どもたちを連れて来てね、と言っているんです」(北原さん)

地元の村で、近隣の村からやってきた農民にリンゴ栽培を指導するアリさん



獅子舞の練習に参加するアリさん(左から2人目)とシャフーさん。町役場の呼び掛けで、2人が家族に電話するときに使うテレホンカードが10万円分も寄せられた

ムルフン村の小学校を訪れた橋場さん



中央アルプスと南アルプスを望む飯島町と、K2を最高峰に頂くカラコルム山脈のふもとに位置するムルフン村。この2つの地域を結んだのは、人と人との縁だった。9・11のアメリカ同時多発テロを境に、それまで主に観光業で現金を得ていた農民の収入が激減したムルフン村から相談を受けていた在パキスタン日本大使館(当時)の近藤陽子さんは、友人である飯島町在住の橋場みどりさんにそのことを話した。飯島町には、製造業で働く外国人が多い。橋場さんは仕事の傍ら、外国人住民の生活相談や日本語・外国語教室などを運営する飯島町国際協力会の会長をしている。「ムルフン村にもリンゴはあるが、手入れをしないため、その実は小さく商品価値が低い。果樹栽培が盛んな飯島町に、ぜひ協力してもらえないか」。何度も飯島町に足を運んだ近藤さんの願いを受け、国際協力が主体となつてプロジェクトがスタートした。

収穫が減るのではないかと心配しました。でも、以前は50グラムしかなかったリンゴの実が、手入れをすることによって400グラムにもなった。それを見て手入れの大切さを理解してくれました(シヤフーさん)。栽培方法の改善に加え、販路の開拓にも取り組んでいる。リンゴ農家の佐々木登さんに指導を受けたアムジャッド・アリさんは、「以前は仲買人の言い値で売れるしかありませんでしたが、今では組合を作り、直接市場と価格の交渉をしています」と胸を張る。3年前、北原さんとともにムルフン村を訪ねた佐々木さんは、「現地では『なったものを採る』から『ならせて採る』に変わってきた。あとは彼ら自身で地元へ合ったやり方を工夫して行ってほしい」と期待を寄せる。来年はプロジェクトの総仕上げとして、町から専門家をムルフン村に派遣する予定だ。この協力は、飯島町にも大きな「果実」をもたらしているようだ。アリさんたちが小・中学校を訪問したり交流行事に参加することで、町の人々が地元の良さを見直しているのだ。橋場さんは言う。「継承者がいないためにリンゴの木を切る農家を見るのは切なくて。プロジェクトをきっかけに若い人たちがリンゴ栽培を見直し、技術を受け継いでくれる」。一方、飯島町まちづくり推進

草の根技術協力事業 地域提案型 募集中!

草の根技術協力事業は、日本のNGO、大学、地方自治体、公益法人などの団体が、これまでに培ってきた経験や技術を生かして行う国際協力をJICAが支援し、共同で実施する事業です。現在、地方自治体(自治体とNGO、大学などとの共同事業も可)を対象とした「地域提案型」の事業を募集中。締切は9月30日(水)まで。

詳しくは [草の根 JICA](#) で [検索](#)

見放される障害者

南米ボリビア中部の都市、コチャバンバの中心部から車で約20分。白い壁にオレンジ色の瓦を葺いた家で、4歳から31歳までの障害を持つ25人がリハビリに励みながら共同生活を送っている。彼らのうち8人が身寄りのない孤児で、ほか10人には家族がいるが面会に来ることはめったにない。週末に家族を迎えに来て自分の家で過ごすことができるのは、わずか7人だ。

多くの病人や障害者を治したことで知られるペルー生まれの修道士、聖マルティンの保護を願って「聖マルティンの家」と名付けられたこの家は、福岡県出身の野原昭子さんが10年前に始めた障害者自立支援施設だ。この運営を、福岡県に事務所を置くNPO法人エルピス会が、寄付集めやボランティアの派遣などの面で支援している。

南米の最貧国ボリビアでは社会福祉制度が整っておらず、障害を負ったせいで家族から見放され、物ごいをする人たちをしばしば目にする。今から14

惨な状態でした。暗い小屋に一人取り残され、尿便に囲まれながら真っ黒い手で頭の脇にあるジャガイモを食べていました。帰り道に訪ねたある病院には、8歳の男の子がいた。足が変形して歩けないこの子も、長い間食べさせてもらえず衰弱し切っていた。この2人の少年は、今では聖マルティンの家の「家族」となっている。

野原さんは言う。「子どもたちが望むのは、自分が愛情を受けるに値する人間だと認められること。そして実際にその愛を受けること」。家では月ごとに誕生会が開かれ、親や友人を招いて楽しみを分かち合っている。

そんな家族に昨年、JICA基金からプレゼントが贈られた。簡単な寝室と炊事場だけしかなかった郊外の畑に、赤レンガ製の勉強部屋とリハビリ用の施設ができたのだ。建設中、知的障害を持つ子どもたちが、自分たちの勉強部屋ができる喜びで工事現場から離れず、石やレンガを運んで手伝うほほ笑ましい姿が見られた。完成した今では、朝目覚めてすぐにノートとえんぴつを持ち、「勉強したい」とスタッフに催促する毎日だ。

野原さんには忘れられない出来事がある。12年前、事故で下半身不随になった青年の車いすを押そうとした時のことだ。「僕は歩けないけれど、手は使えるんだよ。使える手まで奪わないでくれ」。野原さんは青年の言葉にハッと

障害者の自立を目指す「愛の家」

ボリビア第3の都市コチャバンバには、日本人女性が運営する障害者自立支援施設「聖マルティンの家」がある。福岡県のNPO法人エルピス会が支援するこの家の「家族」は、自分たちの力で生きるため、日々リハビリや勉強に励んでいる。



農場にある建物の日よけの下に集う「マルティンの家」の子どもたちとスタッフ

た。「その人が本当に求めているものが何かを理解せずに、助けてあげようとする自分の傲慢さに気付かされたのです」。以来、家では施しではなく障害者の自立を目指した活動が続けられ、これまでで約150人がリハビリや教育

を受けてきた。「子どもたちが回復し、親元に帰って行くときが一番うれい」と話す野原さん。社会から見放されることなく、この家の「家族」のように愛を受けられる障害者が一人でも増えることが望まれる。



(上) 郊外の畑で作業する子どもたちとスタッフ
(下) JICA基金で建てられたリハビリ施設



年前、修道女としてこの国に派遣された野原さんは、仕事の合間に障害者を訪ね、親身に世話をしていた。そのうち、障害を持った人たちが野原さんの元へやってくるようになり、家を貸してくれるという支援者が現れたことで聖マルティンの家の活動が始まった。紆余曲折を経て何とかここまでたどり着いたが、26人いるスタッフの給料や入所者の食費など、野原さんの頭からお金の悩みが離れることはない。

家では、看護師や作業療法士の支えで毎日リハビリが繰り返される。郊外には障害者の作業療法場も兼ねた畑があり、15歳以上の子どもたちが野菜作りや家畜の世話に励んでいる。また、軽症の青年たちが作った飾り物などの商品売店も運営している。

「使える手を奪わないで！」

ある日、野原さんは5000メートルの高地にある貧しい村を訪ねた。そこに住む13歳の障害を持つ少年に会うためだ。「それは言葉も出ないくらい悲



互いに助け合って食事をとる車いすの子ども

あなたの小さな一歩から始まる国際協力 世界の人びとのためのJICA基金

JICAでは、国際協力に関心のある日本の皆さまからの寄付を、開発途上国の貧困削減や環境保全への取り組みに活用する「世界の人びとのためのJICA基金」で受け付けています。皆さまのご支援をお待ちしております。

寄付金の使われ方

お寄せいただいた寄付金は、途上国の貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組むNGOの活動に充てられます。各支援活動や寄付金事業収支についてのご報告は、「JICA寄付サイト」で公表します。

寄付の方法

「JICA寄付サイト」からお申し込み下さい。クレジットカードによる決済や、銀行・郵便振込みなどがお使いいただけます。
JICA寄付サイトURL: <http://www.kifu.jica.go.jp/>



特別レポート

文・写真=友成 晋也 (JICA広報室広報課長)



校庭に出てきて子どもたちと記念撮影。かつて日本でも活躍したワキウリ選手が、キベラスラムを案内してくれた



サファリマラソンのスタート直前。われ先にと、出走者は意欲満々



キベラスラムの小学校を訪問し、少年に話し掛けるQちゃん



マラソンコースは野生動物公園内の敷地からスタート。Qちゃんは参加者一人一人を元気付けながら、最後まで笑顔で走った

スラムの子どもたちに運動靴を届けたい

5 月下旬、ケニアの首都ナイロビ。その町中にある、100万人近い人が住む世界最大のスラム街「キベラ」にQちゃんはいた。初めて訪れた開発途上国の厳しい環境を目の当たりにした、シドニーオリンピックの金メダリスト。だがここでは、日本最高レベルの実績を持つアスリートではなく、目の前の現実をどう受けとめたいのか、動揺しながらも懸命に理解をしようとする一人の「女性」だった。



(上) スタート地点となるケニア野生動物公園で、家畜衛生を教える青年海外協力隊の古賀真由子隊員。活動に思い悩む古賀隊員にQちゃんは「やってきたことは決して無駄にはならないよ」とエールを送った
(下) 運動靴の贈呈先の一つ、ナイロビ孤児院の子どもたちの前で。右端は幼児教育を指導する山本恭子隊員

”Qちゃんが国際協力“と出会った日

ケニアの子どもたちに走る楽しさを伝えたい。Qちゃんの愛称で知られるシドニーオリンピックの金メダリスト・高橋尚子さんは、日本全国から集めた運動靴を届けるため首都ナイロビを訪問。人々との触れ合いを通じて、国際協力への第一歩を踏み出した。

日本国内で使われなくなった運動靴を募り、ケニアの子どもたちに寄贈しようというこの試みは、まさに「走ること」を極めたQちゃんならではの企画。環境雑誌「ソトコト」が主催する「第1回ソトコト・サファリマラソン」の一つの柱となるイベントである。JICAも、運動靴の贈り先として青年海外協力隊の配属先を紹介するなど、協力をすることになった。

滞在2日目、サファリマラソンの現地スタッフとして協力していたソウルオリンピックの銀メダリスト、ダグラス・ワキウリ選手の紹介で、スラム街の一角にある小学校を訪れたQちゃん。「靴を贈れば喜んでもらえる」と思っていました。後でそう語った彼女が見たものは、不衛生

で貧しい環境の中に生きるまっすぐな笑顔の子どもたちだった。

子どもたちと夢を語る

「みなさんの夢は何ですか？」とある教室をのぞいたQちゃんが、小学校低学年と思われる子どもたちに語り掛ける。「パイロット！」「先生！」「看護師！」
彼女がどんな人なのか、よく理解していないだろう子どもたちは、日本のテレビ局の取材でカメラが入って、いつもとちよつと違う雰囲気にならず戸惑っている様子。それでも、まっすぐな目で一生懸命答える。子どもたちの質問にも最初は一つ一つ丁寧に答えていたQちゃんだが、そのうち無言になり、最後はただただうなずくだけになっていた。

教室から出てきたQちゃんは、言葉を選ぼうようにして言う。「こんな状況の中でも、子どもたちは夢を持っていてるんですね」。いつもはじつと相手の目を見て話す彼女だが、このときは珍しく視線の方向が定まらず、目を真っ赤にしながらか続けた。「この子たちはすごいと思います」

キベラスラムの外に出ようと思えば、いつでも出られる。物理的な障壁は何もない。しかし、そこには目

に見えない大きな壁が存在する。スラム街に生まれ育った事実を背負って生きる子どもたち。スラムから外の世界に出て成功した人もいるというが、極めてまれなことのようなだ。生まれながらの環境にハンデを背負って育つ子どもたちが持つ夢は、夢のまま終わるのであろう厳しい現実。日本では誰しにも与えられるチャンスを得ることができない世界。Qちゃんは、その圧倒的な厳しい現実の中で生きる子どもたちに、これまでの価値観が大きく変わるのを感じたようだった。

「私は甘かった」

靴を贈ればみんなが喜ぶ。その単純な事実とは裏腹に、日本の常識や価値観では分からない、厳しい環境に生きる子どもたち。彼らにとって靴は、けがや不衛生な環境から身を守ってくれるだけでなく、人生をも変える可能性がある。そう気付いたQちゃんのこの一言は、超一流のアスリートが新たな世界に足を踏み入れた大きな一歩だったのかもしれない。

国際交流が「正面から向き合ってお互いを理解し合うもの」だとすると、国際協力は「同じ方向を見ながら未来に向かって共に進むこと」。この日Qちゃんは、間違いなく「国際協力」のスタートラインに立った。

Q 定年後、ボランティアに参加できますか？

団塊の世代が次々と定年を迎え、第2の活躍の場として、海外ボランティアに関心を持つ人が増えている。そんなシニア世代を途上国へ派遣する「シニア海外ボランティア」とは。



(上) 募集説明会では個別相談も受け付けている
(左) カンボジアの人々にとって貴重なタンパク源となる淡水魚やエビの養殖技術を指導するシニア海外ボランティア (撮影: 今村健志朗)

JICA 青年海外協力隊事務局
選考課

大関 郁

PROFILE

大学卒業後、2006年にJICA就職。東南アジア第一部(当時)とラオス事務所で研修後、07年4月より現職。シニア海外ボランティアの募集・選考を担当。



「その方の意志にかなうよう 要請とのマッチングを行います」

他方で最近では、特別な技術や経験がなくても応募できる職種が徐々に増えています。例えば、青少年に倫理やモラル、家族の大切さなどを教える活動や、趣味の手芸や料理を障害者のリハビリとして指導する活動など

シニア世代の持つ技術や経験は、開発途上国で非常に求められています。募集は春と秋の年2回※1。毎回300〜400件のボランティア受け入れの要望(要請)が各途上国政府より上がってきますが、中でも応募が集中するのは、日本の高度経済成長を支えてきた生産性向上や品質管理といった専門分野(職種)です。また、柔道や合気道など長年続けてきたスポーツを教えてみたいという人も多いです。活動が1〜2年間※2に及ぶため、自分の持つ技術や専門性とマッチした職種のほうが、無理なく活動を続けられると思います。

シニア海外ボランティアは、40〜69歳の日本国籍を持つ方ならどなたでも応募できます。今年度の春募集では918人もの応募があり、うち半数以上が60代。定年や早期退職で仕事有一段落したこの時期に、次のライフステージの過ごし方として海外ボランティアを考える人が増えているようです。「若いとき青年海外協力隊に参加しなかったけれど、家族がいたので断念した」という人、「妻と行った旅行先で貧困の現実を目の当たりにし、自分も何かしたいと思っただ」という人など、応募動機はさまざまです。

世界も、自分も、変えるシゴト。

<http://www.jica.go.jp/activities/sv/>
募集概要や経験談などはこちらから!

シニア海外ボランティア
で
検索

シニア世代での海外ボランティア挑戦は、一大決心のことと思います。JICAとしても、できる限りその方の意志にかなうよう、要請とのマッチングを行いたいと思っています。

「何かやりたいけれど、自分に何ができるのかわからない」と悩んでいる人は、電話または募集時期に全国各地で開かれる説明会で、個別相談も受け付けていますので、気軽に相談してみてください。

そして、多数のシニアの方が心配されるのが、治安と健康管理、語学。場所によって夜間外出が禁止になる場合もありますが、JICAでは各種の安全対策を実施していますので過度の心配は不要です。また現地では、その土地特有の病気にかかったり、疲労の蓄積で体調を崩す人もいますが、そんなときは各派遣国にいる健康管理員※3が相談に乗ってくれます。また健康診断のため、日本に一時帰国する制度もあります。語学に不安がある方も、派遣前訓練と訓練開始前の事前学習※4でJICAがサポートしていきます。

※1 日系社会シニア・ボランティアは秋募集の年1回。 ※2 1年未満の短期ボランティアもある。
※3 周辺国の健康管理員が兼轄する場合もある。 ※4 英語、スペイン語、シハラ語はインターネット上で、その他の言語は紙ベースで基礎編を学ぶ。

01 ベトナム初の国産麻疹ワクチンに日本が協力

5月21日、日本の技術協力により製造された麻疹ワクチンのベトナムでの販売が同国政府から承認され、今後、子どもたちに接種されることになりました。

子どもの死亡率低下と感染症予防のため、ベトナムではポリオや結核など6大疾患とそのほか4疾患の予防接種を推進するとともに、ワクチンの国内生産に取り組んできました。その中で、これまで唯一輸入に頼っていたのが、麻疹ワクチンでした。

そこでJICAは、日本の無償資金協力で整備された「ワクチン・生物製剤研究・製造センター」に対し、学校法人北里研究所生物製剤研究所の協力のもと、麻疹ワクチンの製造技術を移転。同センターは、ベトナムで初めて、世界保健機関（WHO）の医薬品適正製造基準を満たすワクチンを作ることに成功しました。

これにより、将来的には他国への輸出が可能になり、今後ベトナムが、周辺国へのワクチン供給拠点へと成長していくことも期待されています。



製剤技術を指導する様子

02 ガンバ大阪のユニホームやサッカーボールがマラウイへ

サッカーのJリーグ所属チーム「ガンバ大阪」が、JICAの「世界の笑顔のために」プログラムを通じ、ユニホームとサッカーボールを寄贈することになり、6月17日に大阪・万博公園のガンバ大阪練習場で贈呈式が行われました。

同プログラムは、開発途上国で必要とされている物品を国内で募り、青年海外協力隊などのボランティアを通じて各地へ届けるものです。当日は、ガンバ大阪の金森喜久男社

長と松代直樹主将が、チームのユニホーム24着とボール2個をJICA大阪の酒井利文所長に贈呈。酒井所長からは、受領書とともにJICA大阪職員が書いたガンバ大阪への応援メッセージが手渡されました。これらの物品は、マラウイで活動中の隊員を通じ、現地のユースクラブの子どもたちに届けられる予定になっています。

ガンバ大阪では、2006年にジュニアユースチームのコーチが協力隊の短期ボランティアに参加するなど、国際貢献活動を推進しています。JICAも今後さまざまな活動で連携を図っていく予定です。

03 JICA中部が開所式を開催

7月10日、名古屋駅近くのささしまライブ24地区に移転したJICA中部国際センターの開所式が行われました。式典には、海部俊樹・衆議院議員、神田真秋・愛知県知事、河村たかし・名古屋市長をはじめ、外交団、自治体・企業関係者、市民団体の代表者ら約180人が出席し、JICA中部の新たな門出を祝いました。

冒頭にあいさつした緒方貞子・JICA理事長は、「中部地域の活性化は日本全体を元気にし、広く国際社会全体の活性化にもつながります。このセンターが、『名古屋から日本と世界を元気にする』きっかけとなることを祈っています」と述べました。

このJICA中部には、国際協力が体感できる「なごや地球ひろば」が併設されており、6月1日のオープン以来、子どもから大人まで多くの来館者が訪れています。



テープカットに臨む出席者たち

イチャオシ!

BOOK

『フィールドワークからの国際協力』

研究者をはじめ、JICA職員、青年海外協力隊OB/OG、開発コンサルタント、NGOスタッフなど、国際協力を実践する著者たちが、開発途上国でのフィールドワークの体験をつづった一冊。彼らは10代、20代のころの自分を振り返り、本書の対象読者である学生に向けてメッセージを送る。ある著者が語る海外フィールドワークの醍醐味は、「郷に入れば郷に従え、その地域に住んでみて初めて分かる地域よさ、日本のよさ、自分の強さ・弱さ、人の優しさ・ずるさを知ること」。フィールドワークを通して成長するそれぞれの姿は読み応えがある。



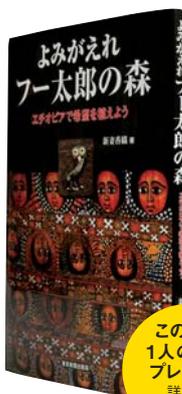
この本を1人の方にプレゼント
詳細は38ページへ

荒木 徹也、井上 真 著
昭和堂
2,625円(税込)

BOOK

『よみがえれフー太郎の森 エチオピアで希望を植えよう』

今年で設立10周年を迎えたNGOフー太郎の森基金の活動記録。1994年1月、基金代表で筆者の新妻さんがエチオピアのラリベラで出会ったふくろうの子どもフー太郎は、水の大切さと水をはぐくむ緑の役割に気付かせてくれた。旅から戻った筆者はNGOを立ち上げ、不思議な縁で出会った人々の手を借りて、荒涼としたラリベラの地に木を植え始めた。手探りでスタートした活動だが、10年後の今、町には確実に緑がよみがえっている。カラー写真を多用した本書にはエチオピア各地の観光情報も盛り込まれ、ガイドブックとして読んでも楽しい。



新妻 香織 著
東京新聞出版局
1,600円(税込)

この本を1人の方にプレゼント
詳細は38ページへ

EVENT

シンポジウム 『日本も元気にする海外ボランティア』 —世界も、自分も、変えるシゴト。—

地方の過疎化や外国人労働者の増加に伴う諸問題など、日本社会が抱える課題に対し、青年海外協力隊のOB/OGがその経験を生かしながら、地域社会の活性化に取り組む姿を紹介。第一部は中田宏・横浜市長の基調講演、第二部は協力隊OB/OGを迎え、JICAボランティア事業が果たすべき役割について議論する。

日時：8月30日(日)14時~17時15分(開場は13時)
場所：有楽町朝日マリオンホール(東京都千代田区)
定員：600人 ※事前申込が必要。
応募締切：8月14日(金)
応募方法：はがき(締切日消印有効)、FAX、ウェブのいずれか
応募先：〒104-8665 東京・京橋支店私書箱303号
朝日新聞東京本社広告局「国際協力トークイベント」係
FAX：03-5972-6634 URL：http://www.asahi.com/e-post/

MOVIE

『花と兵隊』

太平洋戦争中、約19万の日本兵が、命を落としたビルマ(ミャンマー)。「花と兵隊」はタイ・ビルマ国境付近で敗戦を迎えた後、祖国に帰らなかった6人の日本人「未帰還兵」を描いたドキュメンタリー映画。敗戦後、自らの意思で所属部隊を離れ、現地に残った日本兵たちは、軍隊で培った技術を生かし、ある者は医療技術を、ある者は農業用のポンプ施設を土地に残すなど、戦後の復興に貢献した。彼らはなぜ帰らなかったのか。高齢を迎えた今、何を思うのか。敗戦から60余年を経て90歳を前後する彼らを、当時20代だった松林要樹監督が、2005年から3年にわたる取材でその謎に挑んだ。



映画「花と兵隊」より

2009年/日本/106分
監督・撮影・編集：松林要樹
公開：8月8日(土)よりシアター・イメージフォーラム(東京・渋谷)にてロードショー、ほか全国順次公開
URL：http://www.hanatoheitai.jp/

Ethiopia

[エチオピア]

文=佐々木 薫(株式会社生活の木)

写真=那須野 ゆたか(写真家)

静ひつ の 時 コ ー ヒ ー セ レ モ ニ ー



真っ赤なコーヒーの実を、かごいっぱいに入れて歩く村人たち。野生コーヒーの森には、自然の生態系が残っている



D.専用のカップは湯のみ茶碗を小さくしたような形で、東洋的なもの。色彩が愛らしい
 E.コーヒー豆は縦長の白に入れ、木槌を使ってパウダー状になるまでつく
 F.コーヒーを沸かすための専用のポット「ジュベナ」。ずっしりとしてセレモニーにふさわしい風格を持つ
 G.実は一粒ずつ、摘みごろのものを選び、手摘みで収穫される

世界中で愛されるコーヒー。エチオピアは、日本でも広く親しまれているアラビカ種の生産地であり、コーヒー発祥の地としても知られる。国土の中央を走る大地溝帯が個性的な風土を生み出し、西部の緑豊かな森林にはコーヒーの木が自生する。

カファ地方——その名が「Coffee」の語源になったともいわれるこの地域の村を訪ねると、赤い実をたわわにつけるコーヒーの森、そして森とともに生きる人々の姿があった。コーヒーの実は10月から4〜5カ月かけて手摘みで収穫される。農家による小規模生産が多いエチオピアのコーヒー。この時期、一家総出で働く姿はほほ笑ましい。

コーヒー豆は、エチオピアの重要な輸産業だが、国民にも愛され、朝に夕に人々はよくコーヒーを飲む。コーヒーセレモニーと呼ばれる伝統的な飲み方があり、一家の主婦が家族や客に一連の流儀でもてなす。それは、日本の茶道の作法にもどこか似ている。

セレモニーの手順はこうだ。まず、コーヒーポット、鍋、カップなど、使う道具をすべて床に並べ、ポットの水を炭火にかける。その間、いった豆を木臼でパウダー状に砕き、沸いた湯の中へ。再び沸騰したら火から降ろしてしばらく置き、粉がそこに沈むのを待つ。そして、その上澄み液だけを上手にカップに注ぎ分け、客に配る。庭先でコーヒーを片手に会話を楽しみ、仕事の疲れを癒やす。

A.コーヒーを取り分けるのは、一家の主婦の重要な仕事。カップを乗せた台の周囲にまかれる葉にも、その場を清める意味がある
 B.セレモニーでは、まず年長者からコーヒーが配られる
 C.専用のベッドの上に豆を広げ、均一に乾くよう手でかき混ぜる



農家の庭先で行われるコーヒーセレモニー



セレモニーに欠かせないのが「乳香」と呼ばれる薫香だ。乳香とは、カンラン科の樹木の幹から採れる樹脂。その香りは、木のおいに柑橘系のさわやかさが漂う独特のもの。鎮静効果や深いリラクゼーション効果がある。カンラン科の灌木が多く生育し、乳香の産地でもあるエチオピア。コーヒーと同様、大半は輸出されるが、小さな村の市場には専門の店がいくつも並ぶ。セレモニーは香煙とともに邪気を払い、平和を祈り、日々の生活に感謝する神聖な場である。

コーヒーこそ、わが人生——。人々は日に2度3度と、このセレモニーを楽しむ。のどを潤し、香りに身をゆだね、静ひつの時を楽しむ。そのスピリチュアリティを大切にする様は、彼らの敬虔な宗教心にも通ずるものがあるような気がする。(39ページに関連記事)



H.市場には、薫香のための香料を売る店が必ずある
I.殻つきのコーヒーの実をバターでいって食べる習慣もある
J.この国の人たちは宗教心が厚く、イスラム教徒とキリスト教徒が平和に共存する
K.首都アディスアベバの丘から眺める夕日

K



L



M

L. 東部の乾燥地域では乳香の木が自生し、遊牧生活をする人々の手で収穫される
M. 乾燥地域には乳香とともに「ハブラシの木」と呼ばれる抗菌作用の高い木が生育する



H



雨期の集中豪雨が荒涼とした土地を削り取っていく



土壌侵食を防ぐため、斜面の土地をテラス状に整備している



自分たちの計画を話し合う女性グループ

JICAの活動 in エチオピア

食料安全保障の確立に加え 新たに産業開発を支援

食料不足が人々の生命と生活を脅かしているエチオピア。日本は、食料安全保障の確立を大きな目標に掲げて支援に取り組むことに加え、産業開発を後押しする協力も始めようとしている。

貧困と飢餓の象徴として語られてきたエチオピアだが、ここ4年間の経済成長率の平均は11%にも上る。しかし、今後もこのペースを維持できるかどうかは予断を許さない。金融危機に伴う投資や海外送金の減少など間接的な負の影響に加え、主要産業が農業であるエチオピアの経済・社会状況は、降雨量に左右されるからだ。

日本はエチオピアに対する協力の大きな目標として食料安全保障の確立を掲げ、そのもとで農業・農村開発、生活用水の管理、社会経済インフラなどを重点分野に挙げている。農業は国内総生産の約半分、輸出額の60%程度を占め、人口の80%の生計を支えている。しかし人口の10%

前後が食料援助を必要としており、農業分野の安定と拡大は経済成長の核であると同時に、貧困削減のカギを握っている。

この分野でJICAは、慢性的な食料不足に陥っているアムハラ州の東部地域を対象に「アムハラ州流域管理による生計改善計画調査」を展開中だ。ここでは、過剰に耕地を広げてしまったため激しい土壌侵食が起きており、農業生産性の低下など、小規模農民の生活に大きな影響を与えている。この協力では、土壌侵食を防ぐ試みや、アグロフォレストリー（同じ土地で樹木と作物を栽培する土地利用法）、改良かまどの普及などによって、自然環境の改善を図っている。同時

に、家畜の生産性を高めるなど、農民の生計向上を目指した活動も行っている。

一方、政府の強い要望を受けて産業開発支援も開始。政策対話支援と「カイゼン」を含む技術支援の二本柱で、同国の経済発展を支えていく予定だ。

■JICAの協力実績(人数ベース) 2009年7月1日現在

	2008年	累計
研修員受入	84人	1,635人
専門家派遣	42人	421人
青年海外協力隊	65人	501人
シニア海外ボランティア	3人	8人

事務所開設:1993年

エチオピア正教会の聖地ラリベラの岩窟教会群は世界遺産に指定されている。12世紀ごろ、巨大な一枚岩を掘り下げた築られた。



国土の3分の2が海拔2,000メートル以上の高地であるエチオピアは、これまで世界的に有名なマラソンランナーを多く輩出している。



首都: アディスアベバ
面積: 109万7,000km²(日本の約3倍)
人口: 7,910万人(2008年)
公用語: アムハラ語、英語
宗教: キリスト教、イスラム教ほか
1人当たり国民総所得(GNI): 220ドル(08年)
経路: 日本からの直行便はなく、バンコクかドバイ経由が一般的
通貨: ブル(BIRR) 1BIRR=約9円(09年7月現在)
気候: 乾期(10~5月)と大雨期(6~9月)に分かれる。



過剰な耕作や放牧、森林破壊などにより多くの土地が荒れてしまった。かつての森林を回復するためJICAやNGOなどが自然環境の改善に取り組んでいる。



地球ギャラリー Vol.11

Ethiopia

エチオピア

Illustration / Hori Takao

ゲラ

アムハラ語の表記に用いられる「ワイルド」という文字。エチオピアの人々は、アフリカには数少ない固有の文字を使用してきた。

エチオピア料理 ピリッと辛い鶏肉の煮込み「ドロワット」



「エチオピアでは、男子厨房に入らずが基本。でも私の母は息子たちに料理を教えてくれました」。東京・赤坂「SAFARI」のシェフ、ワンダサンさんが作るエチオピア料理はおふくろの味。新宿の老舗アフリカ料理店で10年以上腕を振るった後、2008年2月にこの店をオープンさせた。

エチオピア料理の主食インジェラは、テフという穀物の粉を水で溶いて発酵させ、クレープ状に焼いたもの。この上にワット(シチュー)を盛って食べる。残念ながらテフは日本では手に入らないため、ここで紹介するのは鶏肉(ドロ)の煮込み、「ドロワット」。お祭りのときに食べる人気のおかずだ。インジェラの代わりに、「こはんやパン」と一緒にどうぞ。

「将来、国に帰ったら男性シェフを養成したい」と語るワンダサンさん。話し好きな彼女に、エチオピアのことを聞いてみよう。

〈ドロワット〉

【材料(4人分)】

- タマネギ2個 / 鶏モモ肉4枚 / バルバレ(パプリカと赤唐辛子少々)のミックスペース / 小さじ4 / ゆで卵4個 / レモン汁少々 / 塩少々 / サラダ油少々

【作り方】

1. 鶏モモ肉の皮を取って洗い、レモン汁と塩でもむ。15分ほど置いてから水で洗い流し、肉に切り込みを入れる。
 2. みじん切りにしたタマネギをよくいため、水気がなくなったらサラダ油を加える。バルバレを加え、茶色になるまでよくいためたら1を入れて焦げないように混ぜる。
 3. 肉に火が通ったら水を1カップ加え煮込む。最後にゆで卵を加えてさらに煮込む。
- ☆もし手に入れば、香り豊かなエチオピアンバターを加えるとグッと風味が増す。



SAFARI
〒107-0052
東京都港区赤坂3-13-1 ベルズ赤坂2F
TEL:03-5571-5854
URL:<http://safariakasaka.blog17.fc2.com/>
ランチ:11:00~15:00 デイナー:17:00~23:00
※SAFARIでインジェラを食べたい人は、テフの発酵に必要な4日前までに予約が必要。

■「5月号へのコメント」 JICA's World を拝見するたびに、いかに自分たちの生活が恵まれているかを思います。その一方で世界の国々では、安全な予防接種を受けられなかったり、満足な食事をとれなかったり貧しい生活を送っている人たちも数多くいます。「広報室から」にもあるように一人の人間、日本人として世界にもっと目を向け、自分たちに何ができるか考えたいと思います。(群馬県・28歳・女性・嘱託職員)

■「5月号へのコメント」写真が美しく楽しみです。中学校の教室にそれとなくおいておく生徒がめくってみているのですが、そんな読み方でも、視野を広く持つことの一つのサジェスションになるかと思っております。いつか「地球ひろば」につれていけたらと思っております。(埼玉県・59歳・女性・教員・三橋文江)

■「6月号メコン特集へのコメント」メコン川流域には何度か観光旅行で訪れた事がありますが、本誌に紹介されている様な協力案件が有るとは知りませんでした。ジャイカの活躍にほこらしさを感じます。後進国の発展の為、さらなる御活躍を期待します。(福井県・60歳・男性・会社員)

■「6月号へのコメント」今回、JICA 中部の中に「なごや地球ひろば」が出来たとの事で、初めて訪問しました。中々、こうした取り組みを発信する場所・機会がなかったので、大変ありがたく、且つうれしく思います。今後何かにつけて、情報収集に伺いたいと思っております。(愛知県・53歳・男性・無職・稲田道弘)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

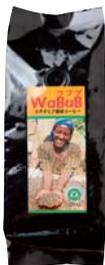
プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2009年9月15日

Email: jica@idj.co.jp
FAX: 03-3582-5745 (『JICA's World』編集部宛)

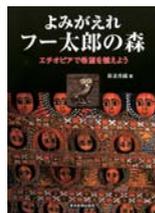
- ① エチオピア森林コーヒー-WaBuB
- ② 書籍『フィールドワークからの国際協力』(p30参照)
- ③ 書籍『よみがえれフー太郎の森 エチオピアで希望を植えよう』(p30参照)



①



②



③

本誌をご希望の場合は
送料ご負担(200円)にて
お送りいたします。



申込方法

氏名・住所・電話番号・ご希望の号数もしくは送付期間を明記の上、下記にお申し込みください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 業務部(発送代行)
住所 〒107-0052 東京都港区赤坂2-13-19 多聞堂ビル
TEL 03-3584-2191
FAX 03-3582-5745
Email order@idj.co.jp
支払方法 「ゆうメール」の着払いとなりますので、
本誌と引き替えに200円をお支払いください。

次号予告 (2009年9月1日発行予定)

未来への投資

国づくり・人づくりに生かされている
円借款事業について紹介します。



© Yuki Asada

エチオピアの森がはぐくむコーヒー

エチオピア南西部のベレテ・ゲラ地域。その深い森に自生するコーヒーの木から、今日もまた、村人たちが真っ赤なコーヒーの実を一粒ずつ丁寧に摘み取っていく。

この地域は、貴重な森林生態系から生まれる「森林コーヒー」の産地として有名。しかし近年は、過度の伐採や人口増加による森林の減少が深刻な問題となっている。そこでJICAは、2006年より「ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2」を実施。住民から成る森林管理組合（WaBuB）の組織化、WaBuBによる森林管理、コーヒーの生産・品質管理の改善を支援してきた。

そして、この森林コーヒーの商品化

を手掛けるのが、(株)生活の木の宇田川僚一専務取締役。これまでも、ガーナで採れるシアバターで作る石けんを日本で販売したり、地域の開発に役立つ“コミュニティートレード”に積極的に取り組んできた。

現在は、首都アディスアベバの仲介業者を通じて同地域で採れた生豆を輸入しているが、2010年には村人たちが手焙煎した豆を直接買い取り、日本で販売する計画だ。「現地の人は深い煎りのコーヒーを好みますが、日本人向けには少し煎りを浅くするとか、日本で売れるよう試行錯誤しています」。

森のおいを感じながら、ほろ苦いコーヒーを味わうー。何とも言えない、至福のひとつときだ。(31ページに関連記事)



ベレテ・ゲラ地域のコーヒーについて話す宇田川専務取締役(右)と西村勉JICA専門家

問:(株)生活の木
TEL:03-3409-1781
FAX:03-3400-4988
URL:<http://www.treeoflife.co.jp/>

★エチオピア森林コーヒーWaBuBを3人の方にプレゼント! 詳細は38ページへ



途上国で見つけた愛のカタチ

夏木 マリ

NATSUKI MARI



© Keibun Miyamoto

PROFILE

東京都出身。1993年から演出している自身の作品「印象派」が国内外で好評を博している。週刊誌「AERA」（朝日新聞社）にて好評連載中。フランス広報大使。今年6月、パーカッション奏者・齋藤ノブ氏と共同で、バラの販売を通じて開発途上国を支援する「One of Love」プロジェクト(<http://www.oneoflove.org/>)を立ち上げた。

年を重ねるにつれ、自分の好きな仕事もできるようになってきて、一人の女性として、何か人の役に立ちたいと思うようになりました。まずは身近にできることからと思い、バングラデシュ、エチオピア、エルサルバドルの子どもチャイルドスポンサーを始めました。

最初は手紙などを通じて交流していたんですが、やはり彼らと直接会って触れ合いたいという気持ちが強くなり、2008年6月にバングラデシュに行くことに決めました。

実はこれまで、開発途上国と呼ばれる場所にはほとんど行ったことがありませんでした。正直少し不安もありましたが、私自身パートナーができたこともあり、二人でなら何かできるんじゃないかと。一歩踏み出す勇氣が出たんです。

バングラデシュの子どもたちは、初

めのうちは私たちを見てどうしたらいいかわからない様子でした。でも、彼の楽器（ジャンベ）に合わせて私が歌い始めた瞬間、ぱっと笑顔になって。とてもうれしかった。文字通り「音楽に国境はない」と感じた瞬間でした。

続いて訪問したエチオピアでは、JICAの「^{まなぶ}ManaBUプロジェクト※」が行われた学校も視察しました。ここの生徒たちは、学ぶ意欲が本当に高い。プロジェクト終了後も、地域で学校を運営していくというシステムがしっかり定着していて、人々の力が着実に育っていると感じました。

そしてそのエチオピアで、大変驚く出来事がありました。“バラの花”との出会いです。それまで、アフリカでバラが栽培されていることを知らなかったので、広々とした農園にきれいに咲き誇るバラを見てとても感動しました。

そして帰国後、現地で出会った子

どもたちとバラ、音楽をつないで何かできないかと思い、「One of Love」プロジェクトを立ち上げました。バラを一輪購入すると、売り上げの15%が寄付されるという仕組みです。今は東京の一店舗のみでの販売ですが、これから少しずつ全国に広げ、またチャリティーライブも開催していきたいと考えています。そして最終的な目標は「途上国にバラ農園を作ること」。モノをあげるとか、一方的な支援でなく、現地の人々の雇用創出にもつながって、自助努力が生まれるきっかけになればと思いました。

私の大好きなバラを使ったプロジェクト。これも一つの愛のカタチだと思います。一人でも多くの子どもたちに愛が届きますように。

※エチオピア・オロミア州で実施された「住民参加型基礎教育改善プロジェクト」（08年3月終了）の通称。08年9月より同州で「住民参加型初等教育改善プロジェクト」がスタート。